

巻頭の ことば

金澤直人

本学内にも多数のクラブ、同好会などが活動しているが、国語国文学研究会、略称国研もその一つとして堅実な歩みが続けていることはよろこばしいことである。しかも国研は本学創立の当初から、最も早く発足した部会の一つで、時に若干の盛衰はあったものの、大勢においては常にたゆみなく、地味ながらもその存在を誇示し得る活動が続けてきたと自負している。

全学的なクラブであるので、会員は必ずしも大学学科の中での国語国文学専攻の者とはかぎらない。あるいは農学部、工学部の学生であったり、工学部の所属であったりして、会員としての実際活動一年で水戸を離れていった諸君もある。こういう面での多様さが、また楽しいところでもあった。

国語、国文学の全領域を対象とし得るわけであるから、その面でも会は多彩な活動をしているといえる。あるいは県内の方言調査に出かけ、あるいは万葉源氏を読み、そして近代諸作家に触れてみたりもしてきている。

雰囲気として、非常に学究的にかたまっていた時もあり、もう少し気楽な同好会風にくだけた時もあったようである。ただいずれの場合をも通じて学術部

会としての良心と品位を持ちつづけてきたと思う。

そういった事情から、会を卒業していった先輩との結びつきも深く、種々の会の行事にあたって先輩諸子が顔をみせてくれることも多かった。そして幸にしてOB会の組織もできた。ただなにぶんにも長い年月を通じてのことなので、OB諸君の間でも、在学中の四年間を軸としてその前後をあわせた数年間毎に、おのずから多少の親疎の別もあり、気風の相違もあって、運営上必ずしも問題がないわけでもないようである。しかし同じく一つの国研の思い出につながるOB会が、よき指導者ともなり後援者ともなってくれることを疑わない。

国研では機関誌として『国語国文学』を発刊してきたが、都合があつてここ二、三年休刊していた。今回復刊できることになったのはよろこばしく、そしてここにも先輩先学の玉稿を得て復刊の事が成っていることを記して謝意を表する次第である。

わたくしごとにはわたくし恐縮ではあるが、わたくしは国研の当初から関係してきているのであるけれども、その間、有効な指導誘掖のできなかったことを申しわけなく思うと共に、今は会誌の復刊をよろこびに思い、ふと心に浮かぶ国研のことども二、三をしるして復刊巻頭のことばとする次第である。